

平成17年4月8日

平成16年度教育改革推進モデル事業 研究報告書

学校法人名	学校法人高杉学園
学校名	吉塚幼稚園
所在地及び 連絡先 担当者名	福岡市博多区吉塚5-5-39 TEL 092 - 621 - 1055 教頭 高杉洋史

1 事業のテーマおよび目的

テーマ 稲を育て、稲わらを利用した秘密基地建設

目的 もみの播種から始めるイネの栽培を通して、自然とのふれあい、田んぼの感触、田んぼに生息するタニシやカエルなどと触れ合うことでの自然体験を高め、日本人の主食である米がどのようにしてできるのかを理解し、食に対する感謝の心を育てることが教育目標であるが、この目標を体験を通して教育する。具体的には稲の栽培で、できた稲藁を利用して、園内の要所要所に子どもたちがデザインした秘密基地を建設し、年少、年中、年長の縦割り、異年齢の集団の中で数十年前までは見られた、子ども達の自主的な集団での自然発生的な遊び（特に外遊び）が出来る環境を整える中で、体験的に命の尊さ、大切さを知り、感受性、観察力、客観性の育成などの「本当に生きていくための力」を培う事を目的とする。

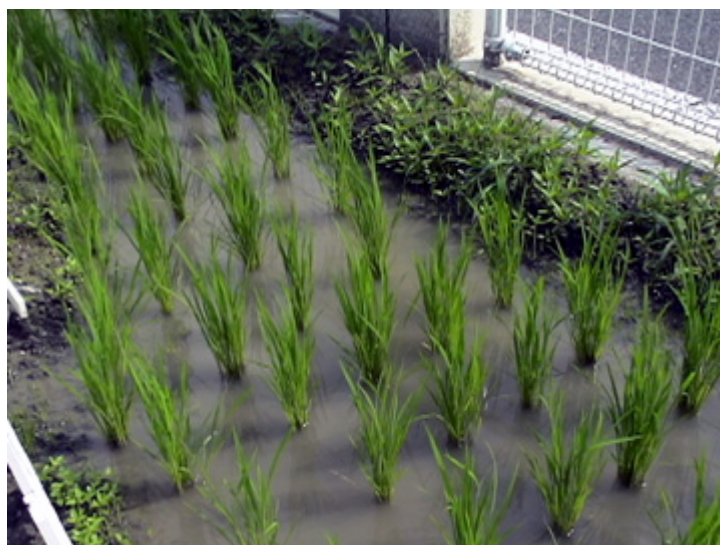
2 事業の内容及び研究成果

5月には、スズメノテッポウ、カラスノエンドウ、レンゲ、スズメノカタビラなど田んぼに生える草の観察と草を使った伝承遊び（草笛づくり、豆を使ったままごと、草すもう、レンゲの王冠、四葉のクローバー探し）を行った。このほか九州・西日本でも減少してきたシロバナタンポポの栽培に挑戦し毎

年の開花を見ている。繁殖も試みている。本園所在地の環境は商業地域であり、自然環境に関して教職員及び保護者が気を配らないと園児が自主的な行動範囲のうちで経験を増やすことが困難である。園児の幼稚園以外の活動場所は舗装されていて、人工的環境である。このような環境にあって、上記のような活動を行うことは、保護者に非常な支持と協力を得ている。また教職員も新鮮な感動を持って教育に当たっている。本園はスクールバスで 15 分のところに 300 坪の自然観察園を所有している事もこれらの活動をスムーズに行えることにつながっている。福岡市有数の面積を誇る西公園に連なっているので、植生に関しても九州北部の自然を反映したものとなっている。最近の園児の行動に関して心配なこととして、バッタなどの昆虫を怖がるかまたは汚れることを極度に恐れる園児が各クラスに数名存在することである。現時点では無理強いせずスクールバスから降りることができない園児には教諭が花などの興味を引くものを採ってきてあげるところから慣れるように指導している。家庭環境、特に母親の清潔への過度の潔癖が考えられ、保護者への自然分野に関する子育てのノウハウの提供はこれからますます重要になってくる。

6月上旬 粃の播種 苗作り 田んぼの土の観察を行った。朝には苗の葉先に水滴ができ、美しく光ることに関して、園児も教職員も感動の声をあげている。また成長の速さに目を見張っている。教職員に関しても自然体験の絶対量の不足の表れではあるが、新鮮な感動は幼児教育に良好な影響をもたらしている。

6月中旬 田お越し 田植え 泥んこ遊び



喜んで挑戦する園児と、しり込みする園児の差がはげしいが、園児には無理強いせず自主性に重きを置いて指導している。株の分株の関係から一回に植える苗の量が経験的に決められている事など稲作に関する文化にもふれている。昼食後の自由時間に田んぼで泥遊びをする園児に関しても、各担任がおおらかに対応していることは、教職員全体がこの取り組みをよく理解している証である。田んぼの土は泥団子の材料に最適で、田んぼの淵の泥は少なくなり、プランターの陰に泥団子が隠され、中々ほほえましい光景を各所に見ることができる。

6月から10月 稲の栽培と観察

田んぼの生物の観察と飼育（主にタニシ、カエル カブトエビ）

本園の田んぼではタニシに関しては自生しているが、カブトエビに関しては例年見る事ができなかった。今回教諭の一人の自宅近くの田んぼにカブトエビが大量発生し、分けてもらうことができた。生態的に非常に珍しい形をしているのでカブトムシに勝るとも劣らない大人気である。



8月上旬の水の管理に関して教職員は一段の知識を得た。一度水を絶つことで根の成長を刺激することは若い教職員には新鮮な驚きであった。園児に対する観察能力向上にも役立つ刺激となった。花の開花が夏休み中なのは残念である。

10月下旬 稲刈り 園児がもっとも喜ぶ過程である。鎌を使うので注意も必要であるが、鎌を見たり触ったりした経験のない教職員もあるのは驚きである。稲の束を束ねるための藁紐の作り方も実習した。現在農家ではこの過程はコンバインで機械化されているので、手作業の稲刈りや乾燥はこのような実習でしか経験できない。



1 1月 精米 すり鉢とボールによる精米方法を教えてもらった。この方法は各自が粃や玄米をじっくり観察できる長所がある。園児たちも手を動かす作業なので喜んで挑戦している。

1 1月 秘密基地の建設

稲藁を用いた秘密基地の建設は主に年長組みが自主選択保育の中で取り組んだ。構造的なことや伝承あそびの指導をおもちゃコンサルタント緒方秀樹氏に仰いだ。



1 2月から3月 秘密基地での異年齢、異なるクラスの友達との人間関係構築、伝承遊びとの融合をおこなった。注連縄や使った藁を燃やすどんど焼きでは焼き芋づくりも経験した。

これらの活動は自主選択保育の手法で取り組んだ。

自主選択保育はチーム保育の一形態で、ひとつの学年をクラス数の2倍の教諭で取り組む。各教諭はそれぞれ別のカリキュラムを用意する。園児は最初に説明を聞いて、自分が最も興味のあるカリキュラムに参加する。この方法はクラス単位の運営より一教諭が担当する園児数が少なくなるケースがほ

とんだので、やや高度な内容も指導することができる。またほかのクラスの園児との交流が経験できるメリットもある。指導サイドも教諭、園長、教頭、主任、講師、保護者など担任以外の人材も園児指導に参加しやすい保育形態である。偶然多数の園児に選択された教諭はアシスタント教諭に応援を頼むシステムである。当初この保育形態は年長で2ヶ月に1回のペースで開始したが、現在は教諭の経験値も上がったので、年長、年中で毎月1回のペースで行っている。この保育は福岡教育大学田中敏明教授の指導の下に取り組んでいる。特に力を入れている点はカリキュラムの内容はもとより、そのカリキュラムがどの程度子どもたちに満足感を与え、教諭が目指した教育効果がいかに実現したか評価することである。そのために自主選択保育の時間の終わりの部分で、園児は各自で満足度を記録カードに絵で表現している。その結果自主選択保育の満足度は行事のような園児が興味を持つ時間と比較しても満足度が高いことが判明した。この結果は2003年度、2004年度保育学会で発表し、2005年度（2005年5月開催予定）にも継続発表の予定である。

結果として、園児、教諭とも積極的に保育に取り組む姿勢が一段と明確になり、そのことが数値として客観的に評価できたことが最大の成果である。

今後の課題

最近はお父さんの会が幼稚園行事を始め、日ごろの保育にも気軽に参加できる雰囲気定着した。これからはよりいっそう父親の参加をうながしていきたい。また家族ぐるみで活動できる企画に発展させたい。福岡市近郊では古代米の赤米を栽培している地域があるので、赤米にも挑戦したい。そのことでうるち米以外の米や、粟、ヒエなどにも触れる機会を作りたい。また、園児の祖父母の協力も得て、お正月の注連飾り作成に挑戦する予定である。

本園総務部長は器械体操の選手なので秘密基地活動にブルーシートと稲藁を材料にした巨大マットを作りより高度な体育活動につなげていく計画である。

とにかく幼稚園の教育は教諭の自己満足に陥りがちであるが、教諭の保育計画とその実施結果をしっかりと評価し、次の保育計画に生かすシステムを作ることには教育内容の向上に有効であり、今後継続して研究する計画である。